



大学における「ケアの倫理」と「評価の倫理」

梶谷, 懐

(Citation)

凌霜, 448:24-26

(Issue Date)

2026-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

発行元の許可を得て登録しています。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499604>





大学における「ケアの倫理」と「評価の倫理」

経済学研究科教授 梶 谷 懐

早いもので、筆者が神戸大学の経済学部に入學してから今年でちょうど35年になる。その頃の大学と、今の大学とでは、どんな点が変わっただろうか。大学教員の仕事に関して言えば、かつての教員に比べて研究以外の仕事が大きく増えた、という点に関しては大きな異論はないだろう。では、当時と比べて、どのような新しい仕事が増えたのだろうか。

筆者は、この30年あまりの間大学教員に新たに増えた仕事は、「ケア」と「評価」に集約されるのではないかと思う。昔の大学は、現在ほど学生をケアしていなかった。教員の都合で休講にすればそれきりで、補講などというものを行う必要はなかった。授業アンケートやFDを通じて学生の声を取り入れながら授業を行うのが望ましいあり方だ、という考え方も共有されていなかった。現代の価値観ではハラスメントととらえられるような教員の言動があっても、それを訴える窓口はなく、よほどひどい事案の時でなければ被害者は泣き寝入りするしかなかった。ましてや、学生が抱えるさまざまな個別の事情に対して「合理的配慮 (Reasonable Accommodation)」を行おう、という発想が、教員から出てくるはずもなかった。

大学が学生のケアに目を向けるようになったと言っても、そ

の比重は教職員によって一様ではない。筆者は昨年度一年間、経済学研究科と経済学部の学生委員を務めたが、まさしく学生委員の中心的な任務は学生のケアである、ということを感じた。その過程で、思ったよりも多くの学生が、特にメンタル面でのケアの必要性に直面している、という現実も見えてきた。逆に言えば、学生委員になるまではその必要性がほとんど見えていなかった。もちろん、ケアが必要とされるのは学生だけに限られない。ケアは今の大学にとって間違いなく不可欠な要素になりつつあるが、一方で拡大するケア労働が特定の教職員に集中しており、その負担の大きさはそれ以外の人間には不可視化されているように思える。

もう一方の「評価」、すなわち大学のパフォーマンスに関する組織内／外からの評価の重要性については、多くの教員にとって今さら言う必要もないだろう。数年前に評議員を務め、法人評価の文章作成に関わった経験から言えば、とにかく「評価」にかかわる文書の作成に膨大な時間と労力が割かれていることに驚かされることが多かった。これもかつての大学にはなかった事態である。社会学者の吉見俊哉の言葉を借りれば、その背景には「2000年代以降、国立大学にも民間的発想の経営手

法を導入することが様々な機会に推奨され、『大学を起点とする日本経済活性化』が重要な政策課題として掲げられた」ことがある。その結果、「大学や学部、それぞれの研究者が知的生産性を十分に挙げられているかをチェックするために、様々な評価制度が導入されていく」ようになったからである（吉見俊哉『大学は何処へ―未来への設計』岩波新書）。

さて、ここで考えたいのは「ケア」と「評価」という、現代の大学にとって避けて通れない二つの要素の相互の関係性である。今や「ケア」およびそれを支える「ケアの倫理」の重要性に対する認識は、日本社会に広く浸透しつつある。『日本経済新聞』が、同誌の看板記事である「経済教室」欄に、11月中旬に3回にわたって「ケアの倫理」と題した専門家の論考を掲載しているのがその象徴だ。

それらの論考によれば、ケアの倫理の提唱者であるキャロル・ギリガンは、それまで西洋の倫理学の中でスタンダードとなっていた「正義の倫理」やそれに基づく道徳的感情の発展理論に対する批判的検討を通じて自らの倫理観を鍛え上げていった。後者では、人びとの道徳観が、自己利益の追求から周囲や組織への順応、そして社会全体に普遍的にあてはまる法則を「正義」と考える段階へと成熟していくのが、望ましいあり方だとされていた。

これに対しギリガンは、特に女性は普遍的な「正しさ」よりも個別の対象との関係性を重視し、その上でできるかぎりすべての人に受容される解決を模索する傾向があることを指摘した。彼女は、こうした「人は誰もが傷つきやすく、他者によるケア

が必要だ」という発想にもとづく道徳観を「ケアの倫理」と呼んだのである（品川哲彦「誰もが誰かにケアされる」『日本経済新聞』2025年11月14日）。

この図式、とくに「普遍性」と「関係性」の対比は、上述の「ケア」と「評価」の関係を考える上でも有用な視点を提供してくれそうだ。大学の「評価」は、客観性や普遍性の観点から、その大学の誰もが納得する優れた点を探し出して、そのエビデンスを記録・公開しようという姿勢に基づいている。それに対し「ケア」はまず困っている当事者に対して、その個別の事情や人間関係によって一様ではない対応が重視される、という側面がある。

問題は、誰もが大学におけるケアの重要性を認識するようになっていながらもかわらず、その取り組みが正当に「評価」されているとはいえない点にある。具体的な「評価」の項目に含まれるのは、教員の発表した論文の数やそのインパクトファクターであったり、海外留学した学生の数であったり、企業や自治体との共同プロジェクトの数であったりする。ただそこに大学がどれだけ学生を「ケア」したか、に関する項目が含まれることはない。

ケアはそもそも数値目標にはそぐわないのだから、これはある意味当然のことである。合理的配慮やカウンセリングを受けた学生や教員の数を、大学が競うようなことがあってはならない。しかし、一方で、「ケアの倫理」と「評価の倫理」との間には存在する矛盾もまた大きい。評価の対象となる研究・教育の成果を挙げるためには、できれば個別の対応を要求されるケア

の問題で煩わされたくない、というのが教員にとっての本音だろう。しかしこのことによって、ますます増えていくケア労働が一部の教職員に集中し、全体としては不可視化され、そのこと自身が新たなケアの必要性を生んでいるのではないだろうか。もちろん、だからといって客観化、数値化された「評価」をやめてしまえばいい、などということが言いたいわけではない。

ただ、筆者には、これまで述べてきたような「評価」と「ケア」の相互の矛盾は、現在の国立大学が抱えている問題とも深く結びついてるように思えてならない。そのことを自覚したうえで、これからの大学はこの二つをどのように両立していけばいいのか、議論を深めていく必要があるのではないだろうか。